

「チ。－地球の運動について－」 魚豊 小学館 2020年12月発行

いくつもの賞やランキングで取り上げられているので、知っている方も多いと思われるが、理系学生や大人にもぜひ読んでみてほしい作品なのでここで取り上げてみたい。

具体的な年代や地名、宗教名は伏せられているものの、中世ヨーロッパを舞台とした地動説を巡る群像劇である。大きく3部構成を成しており、少しずつ時代を進めながら物語が進行していく。

主人公たちは地動説に魅せられ、それを弾圧する支配層（C教）に迫害されることになる。身分も出自も異なる登場人物たちが、ある者は「真実の探求のため」、ある者は「名を挙げるため」、またある者は「金のため」と、それぞれに異なる信念に基づく動機で地動説と関わりをもっていく。当然のこととしてC教から異端として追われ（このモデルであるキリスト教による地動説迫害については、近年では限定的なものであったという説が有力であり、最終盤においてその事にも言及される。）、命を落とすが、やがて、その「想い」は次のものに繋がれてゆく。

実は、「地球が動いているかどうか」や「宇宙が地球を中心に動いているか」ということ、それ自体は、人々の生活に何の影響も与えないものである。しかし、宇宙の構造は宗教観と深く結びつき、つまり人生観そのものの根底を成している。畢竟、地動説への関わり方を通してその人物の信念が浮き彫りになってゆくのである。

科学という概念すらなかった時代の話であるが、科学信仰が極まったとって差し支えないであろう現代においてもその根本的な苦しみや問いは変わることがない。「知性とは?」「自由とは?」「歴史とは?」そして「人は何のために生きるのか」といった普遍的な問いに対して登場人物たちが出していく答えは、現代に生きる我々にとっても大きなヒントを与えてくれる。

勉強することに意味を見出せなくなった時などには、特におすすめ。